The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	閨秀詩人 江馬細香
Author(s)	福島, 理子
Citation	語文. 1988, 50, p. 3-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68775
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

閨秀詩人 江馬細香

福島理子

唐崎松下拜別山陽先生

儂立岸上君在舩　儂は岸上に立ち君は舩に在り。
舩岸相望別愁牽　舩岸相ひ望みて別愁牽く。
人影漸入湖煙小　人影漸く入りて湖煙小し。
罵殺帆腹飽風便　罵殺す、帆腹の風便に飽くを。
躊躇松下去不得　松下に躊躇して去ることを得ず。
萬頃碧波空渺然　萬頃の碧波空しく渺然たり。
二十年中七度別　二十年中七度別る。
未有此別尤難說　未だ有らず、此の別れの尤も說き難きは。

天保元年の春、江馬細香は頼山陽を訪ねて京に在った。閏三月十三日、その滞在を終え、郷里大垣への帰途につく彼女を送り、山陽は詩友を伴って唐崎に赴く。名高い唐崎の松の下に、細香はこの詩を賦し、山陽に寄せた。翌々年の天保三年九月、山陽は世を去り、これが二人の最後の会面となるのであるが、あたかも二人はそのことを予感したかの如く、かたみに名残りを惜んだ。細香の詩には、その別れの痛みが、目前の景と共に直截に歌いこまれている。

元来、この詩の末二句の初稿は

別恨極時幾度誦　別恨極まる時幾度か誦す。

途上賦賜送別篇　途上賦し賜ふ送別の篇。

とあった。しかし、詩稿を手にした山陽はこれに不満を覚え、次の朱批を加えた。

結末、是れ實事なりと雖も、やゝ振はざるを覺ゆ。その無情の語なるを以て爾り。當に、廿年來相逢ひ相別る、未だこの別れの別れ難きにといふ意を云ふべし。

敬慕し合う二人の銷魂の別れである。その胸の中の思いを、詩の一字一字に刻み込まなければならない。――山陽の意を汲んだ細香は、末二句を前掲の如く、初稿に比して遙かに直情的な表現へと改めた。一方、この唐崎詩は対句が用いられず、律詩たるの資格を失っている。にも拘らず、山陽はそれについて何も言及していないのである。

彼らにとって、この時漢詩とは何であったのだろう。思うに、それはもはや衒学的な、知的遊戯ではなく、自由な情の解放の場となっていたのではないか。山陽が細香の詩を評して、

飯餘呼娃圍碁局　飯餘娃を呼びて碁局を圍む

（山陽）ドチラ御勝ナサレ候哉

（「閑居夏日」）

深夜貪涼窓不掩　深夜涼を貪りて窓掩はず

（山陽）不養生ナルヘシ

（「夏夜」）

などと言う時には、それがさらに自由な、対話の手段とまで言い得るものとして把えられているように感ぜられる。山陽、否、彼のみならず、この時期の漢詩人達の最も重んじたものが「実情」と「実景」の描写であったことは、彼らの詩集に施された評語に明らかである。そうした化政期漢詩壇の思潮の中で開花した江馬細香の文学は、近世後期に生きた一女性の心情を伝え、精神のたどった足跡をあるがままに照らし出している。菊池五山は彼女の詩風を「清艶」と評するが、むしろ彼女の詩の真髄は、初期の清艶な詩境から、より内省的な詩境へと転じ、自らの孤独な心を詩に托し得たところにある。いわば、漢詩は細香にとって日々刻々の独白であった。本稿では、その生涯の詩稿である『湘夢遺稿』上下二巻を中心とし、この閨秀詩人の詩風の形成と展開とを追うこととする。

（一）習作時代

〜文化十年（二十七歳）

細香江馬多保と頼山陽の邂逅は、文化十年秋のことである。美濃から伊勢周辺の交友を尋ねての旅の途次、山陽は、蘭医として名高い大垣藩医、江馬蘭斎の許を訪れた。彼はそこで蘭斎の長女である細香と見え、彼女の類い稀な美貌と才能に強く魅かれたのであった。当時、山陽三十四歳、細香二十七歳。山陽は寛政十二年の脱藩事件の後、文化六年、神辺菅茶山の廉塾に身を寄せていたが、翌々年廉塾を去って京都に居を移した。藩からも家からも独立し、文人として立たんとの志に燃えていた折も折細香と出会い、山陽は彼女こそ正に「文人之偶」――自らの妻にふさわしい女性と見初めたのである。

一方、細香はこの年、二十七歳に至るまで他家へ嫁することもなく、父蘭斎の許で書画に耽る日々を過していた。細香は十五歳の頃より京都の玉瀋上人に学び、墨竹画の名手として夙に名を知られていた。晩年こそ詩人たるの自覚を有したものの、若い頃はむしろ画人としての意識の方が強かったであろう。彼女が、山陽の再三の勧めにも関らず、詩集を上梓しようとしなかったのは〝自分は詩人としてよりも、画人として世に交わっているのだ〟との気持ちに依るものとも思われる。何れにせよ、画論書、書画集の類が、初期彼女の教養に資したことは疑いない。

一例を挙げると、細香の蔵書の中『燕間四適』は、巻尾に「文化三丙寅歳　多保写」と記された彼女の筆写本が残っている。文化三年、細香二十歳、山陽と出会い、本格的な詩作を始める七年前に当る。この際は画論を習得する為に学んだのであるが、一方では、黄庭堅、蘇軾の言などを引く通編漢文のこの画論書が、彼女の作詩文の素養として資した点も見逃すことはできない。例えば「題自書墨竹十首」（『湘夢遺稿』巻下）の第四首目「胸裏無成竹。毫端豈得工」という起承句は、蘇軾の「筠簹谷偃竹記」にある「画竹、必先得成竹于胸中、執筆熟視、乃見其欲画者、急起従之、振筆直逐、以追其所見、如兎起鶻落、少縦則逝矣」を出典とするが『東坡文抄』など

に依ったとするよりは『燕間四適』巻之十七「畫、畫竹譜」の項に引くこの言葉を思い起こしたと考える方が妥当であろう。この例に限らず、少時に習得した書画集、画論書の知識が、後年の彼女の数多い画竹詩、詠梅詩に少からず資したものとみなされる。

さらに、文化七年、父江馬蘭斎を訪れた玉泓上人が、竹画を学ぶ彼女に「画法是まで稽古の外他なし。此上は唯書を読むに如くはなし」と助言したと蘭斎記す『好蘭斎漫筆』に見える。最初墨竹画に手を染めた細香が、その修得を端緒として、次第に詩書への造詣を深めて行ったことがたどられるのである。

さて、作詩に興味を覚えた細香に、その手解きをしたのは、詩文に造詣の深かった父蘭斎であったと考えられる。当時の地方詩人では、先ず漢籍に通じた近傍の住職などに師事して詩書を学ぶ例が多いが、細香にはその様な学歴を示す資料は残っていない。また、習作時代の細香について「江戸の山本北山に学んだ」(『日本古典文学大辞典』)とする説もあるが、これは極めて疑わしい。文政二年頃認められた頼山陽書簡の

時に、北山定置れ候へ共、アマリ竹ニ斗ヨリタル貴名字、名曩ハ不面白候ユヘ、嬢々を名に被成、細香ヲ號ニモ字ニモ被成可然候。

という記事がこの説の基づくところであろうが、江戸と繋がりのあった父蘭斎が、人を介して北山に依頼したものとも考え得る。この書簡以外に北山との交渉を示す資料の全くない現段階では、北山と細香の関係は、直接的にはないものと考えた方がよい。菊池五山著す『五山堂詩話』には、北山門下の閨秀詩人が幾人か挙げられているにも関らず、細香についての五山の言及が、

詩禪(梁川星巖)談ず。其郷に閨秀細香あり、……眞に乃紹世聰慧、已にして之れを扣きて、是れ江馬蘭齋の女なるを知る。余、伊勢に客たる日、蘭齋書を寄せて意を道ひ、且、養老瀑の碑本を貽る。今尚篋中に護藏す。書して以て兩重の因緣を表す。

に止まるところからも、北山と細香の師弟関係を考えるよりは、蘭斎を通しての僅かな交渉があった程度と認める方が適切である。

『湘夢遺稿』の中に、文化十年秋、山陽と出会う以前の作品は収められていないが、進歩的な蘭医であった父蘭斎の許、当時としては稀な環境に恵まれ、既に山陽を感嘆させるだけの技量には達していたようである。前にも触れた如く、こうした才能と美貌とを兼ね備えた彼女こそ「文人之偶」にふさわしいと見初めた山陽は「其全身添削仕度」との意を小石元端にもらしている(文化十年十一月十三日、小石元瑞宛頼山陽書簡)。結局細香は山陽と結ばれることなく、生涯独身を通すのであるが、茲来二人は師弟の関係を結び、その交流は天保三年山陽が没するまで、否、細香の心の中では山陽の死後も、その生涯を通して続くのである。

(二) 第一期 山陽門時代

文化十年〜文政三年(三十四歳)

山陽に就いた文化十年より、文政初年頃までに賦された彼女の詩は、柔指に玩ばれたものならではの、軽やかでみずみずしい美しさを身上としている。後年の彼女の詩に著しい凋残の影も、禅風の趣味も全くない。いかにも女性らしい繊細な感覚で季節の訪れが把えられ、若々しい魅力に満ちあふれている。

夏詞

一雙乳燕入簾帷　一雙の乳燕簾帷に入る。
睡夢初醒午漏遲　睡夢初めて醒め午漏遲し。
微汗透襟紅露濕　微汗襟を透して紅露濕ひ、
落釵冒髻綠雲垂　落釵髻を冒ひし綠雲垂る。
窓前綵繡猶慵刺　窓前の綵繡は猶ほ刺すに慵し。
帙裏殘書無意披　帙裏の殘書は披く意無し。
萱草花香曲欄外　萱草花香る曲欄の外。
閑搖羅扇立多時　閑に羅扇を搖して立つこと多時

夏夜

雨晴庭上竹風多　雨晴れて庭上竹風多し。
新月如眉纖影斜　新月眉の如くして纖影斜めなり。
深夜貪涼窻不掩　深夜涼を貪りて窻掩はず。
暗香和枕合歡花　暗香枕に和す合歡の花。

或いは長恨歌の女性美を髣髴させる、或いは新古今の香りを漂わす艶しい美しさ、正に菊池五山の言う如く「清艶」と評するにふさわしい。

当時の細香の蔵書中に『鍾山献』という、明代、金陵の妓女で詩を善くした楊宛、字宛淑の詩を集めた書がある。細香の蔵書はその多くが失われているが、この書は『誠斎詩話』『別裁集序』『塤詞図譜』の三篇と共に細香自ら書写し、一冊に綴じたものが現在も江馬家に存している。『別裁集序』の末尾に、「文化甲戌晩春、写于京師寓居」とあることから推して、共に綴られた『鍾山献』及び他の二書も文化十一年、細香上京の際に写された可能性が強い。さて、この『鍾山献』に収められた詩を閲すると、題のみを取っても「春朝風雨惜冶遊人」「傷春草多情」「三婦艶」「採蓮曲」とある如く、その艶麗なる風が窺える。細香はこの詩集より少からず影響を受けたらしく、『湘夢遺稿』中の次の詩によって、それが確められる。

戲賦楊宛宛十六艶中題

拈蓮子打鴛鴦

雙浮雙浴綠波微　雙び浮き雙び浴して綠波微なり。
不解人間有別離　解せず、人間に別離有るを。
戲取蓮心擲池上　戲れに蓮心を取りて池上に擲つ。
分飛要汝暫相思　分飛せば要ず汝ら暫し相ひ思はん。

右の詩が依った宛淑の詩は、細香手写本『鍾山献』の中に見える次の作である。

拈蓮子打鴛鴦

錦塘相對浴婆娑　錦塘相對して浴すること婆娑たり。
獨坐花前屢見過　獨り花前に坐して屢過るを見る。
拋与蓮心分與苦　蓮心を拋与して苦しみを分與せん。
妬他只爲不如他　他を妬むは只だ他に如かずと爲せばなり。

〝仲睦じいおしどり夫婦に、少しは私の辛い思いも味わわせてやりたいものと、蓮の実を投げつけてやりました〟という設定は、宛淑の原作にそのまま依っている。しかし、細香が「人間に別離有る」と言い「相ひ思」わしめんとする如く、詩中に相思の恋人の別れをほのめかすのは、自らの山陽への愛情を重ね合せて歌ったものであるからかもしれない。

また、次の詩に見える『名媛詩歸』も愛読の書であったようである。

燈下讀名媛詩歸

靜夜沈沈著枕遲　靜夜沈沈枕に著くこと遲し。

挑燈閑讀列媛詞　燈を挑げ閑かに讀む列媛の詞。
才人薄命何如比　才人薄命何如に比せん。
多半空閨恨外詩　多半空閨外を恨むの詩。

『名媛詩歸』は、明の鍾伯敬が編輯し、上古より明に至る閨秀四百十余人の古逸四十余首、諸体の詩二千三十余首等を収めた詞華集である。現在は江馬家の書庫より失われているが、文化十二年頃、細香がこの書を読み耽っていたことが察せられる。

細香に右の如き唐土の閨秀詩を集めた書を勧めたのは、やはり京に彼女を迎えた師山陽ではないだろうか。京・江戸における艶詩の流行も考慮に入れるべきではあるが、それにも増して、細香の詩風を女性らしい優艶なものとして引き伸ばそうとの意図が、この頃の山陽にあったことが明らかである。

文化十一年夏の作である「夏日偶作」

永日如年晝漏遲　永日年の如く晝漏遲し。
霏微細雨熟梅時　霏微たる細雨熟梅の時。
午窻眠足深閨靜　午窻眠り足りて深閨靜かなり。
臨得香奩四艶詩　臨み得たり香奩四艶詩。

同じく文化十一年十月二十三日付の細香宛頼山陽書簡に、細香が浄書した詩に、

是余奩詩。女弟子細香所書。余書易怒張。寫是等詩、如鬚眉男子強學倡舞。細香雖學我書、柔荑所作、自帶嫵媚。粉影脂香、往來紙上、正與詩体相稱矣。

との賛を附して人に贈ったと記されており、右の詩の末句、ものうい夏の午後に手習いをしたという香奩体の艶詩とは、山陽が彼女に浄書をさせるべく送った、自作の詩であったと推測される。

さらに、同年六月十七日付の書簡には、

御淨書は如何。夏は臨池之業、却結句消暑之一助にもなり申候ものに候。洛神も得閑候へば、摹一本、上可申候。

とあり、山陽が彼女の書の手本として、曹植の洛神賦などをも送っていたことが知られる。前の「香奩四艶詩」については今は未詳であるが、洛神賦が洛水の女神、密妃との逢瀬を歌った幽艶な作品であることは周知の如くである。山陽は、大垣の細香の許へ艶麗な詩篇を送り、また京に招いては唐土の閨秀詩を集めた珍しい書などを勧めていたのであろう。それは、細香を喜ばすと共に、彼女に閨秀詩人ならではの詩を作らせようとの意図に依るものではなかっただろうか。

同趣の意図が、細香の詩に施された山陽の評語よりも窺うことができる。

眞閨秀之詩也。
句句柔麗眞女人口吻。鬚眉男子百計模倣、終不可得。
眞女郎詩絕佳。

彼が善しとした細香の詩の批評には、右のような言葉が多い。さらに、江馬家に残る「細香詩下書山陽添削」（巻子本）には、

春水ノ詩、雨夜ノ詩、清婉柔婉、音節諧和、イツモ此風調ニナル樣ニ御作可被成候。

との語が見える。即ち、山陽は彼女を丈夫に互する詩人とするより、むしろ「閨秀詩人」として育てようとしていた。言い換えれば、閨秀であることを前面に出し、女性ならではの優美な詩を作らしめんとしていたのである。

頼山陽のこうした姿勢は、化政期における急速な詩人層の広がり

と無関係ではない。士大夫、士君子の文学として、ごく一部の知識階級にのみ専有されていた漢詩文が、地方にも普及する一方で、次第に下級士人、町人の中にもその作者を生むようになる。この漢詩の普及と流行は、女性をも除外するものではなかった。『五山堂詩話』には、山本北山が既に女流詩人を集め、また江湖詩社の詩人達が女流の詩を顕彰していたことが記されている。

比來閨秀北山先生一家に鐘まる。先生の室、細桃女史、善く卉翎を畫く。女弟子文姫小憲と號す、聰慧詩を善くす、

（『五山堂詩話』巻五）

余、閨秀の詩に逢ふ毎に、必ず抄存して以て流傳を廣む。

（同、巻二）

こうして、化政期には、優れた作品を残した閨秀詩人が少からず現れる。筑前の原采蘋、尾道の平田玉蘊、越前の片山九畹、梁川星巌の妻紅蘭も詩に長じていた。江馬細香はその典型的な一人と言える。

さらに、女流詩人を育てた背景として、清の文人、袁随園の影響を忘れてはなるまい。清代の詩人の中で、化政期の詩人達に最も影響を与えたのは、袁枚、随園先生である。「詩は人の性情なり」と言う随園の『随園詩話』は、当時の詩人に最もよく読まれた書の一つであった。江戸の詩壇における竹枝詩流行も、随園の竹枝詩の賦作が一因となったようである。その随園が女流文学を顕彰し、門下に女流詩人を集めて指導、『随園女弟子選』を刊行したということは、山本北山、大窪詩仏、頼山陽ら、日本の中央詩人に女流漢詩文への興味を持たせる契機となった。

江戸の大窪詩仏は『随園女弟子選』をさらに選して『随園女弟子選選』と題し、天保五年五月に開版した。山陽は詩仏より贈られたその書を「丁度貴処に有てよろしきもの」と、細香に譲ると共に、これに刺激され、細香に詩集上梓を盛んに勧めている。また、天保三年に没した頼山陽を哭す細香の詩には、

癡才弟子非金逸　癡才の弟子は金逸に非ざるも。
授業先生是小倉　業を授くる先生は是れ小倉。

と、山陽を袁随園に擬し、随園が女弟子を育てたことが、彼らの師弟関係に通ずることをほのめかしているのである。

このように、山陽が細香を女流詩人として育てるのに熱心であったのは、時好に沿ったものとも言い得るであろう。しかし、清艶、柔婉の風を彼女の詩風として勧めたことは、必ずしも彼の恣意によるものではない。

先日は終日預御款待忝奉存候、御來喩縷々御丁寧之義奉存候、然は其節御託申上候畫竹對幅扇面弐握、早速御染毫御送與被下忝拝受仕候、貴稿御見せ才情驚き入候、越前蘭女なとよりハ柔婉之趣有之甚感吟仕候、任命略加雌黄候、尚追々拝見可仕候…

（文化十年閏十一月二日付、江馬蘭斎宛　頼山陽書簡）

右は、江馬家を訪れた後、細香の父蘭斎に謝意をこめて認めた頼山陽の書簡である。文化十年十一月十一日、山陽は細香と初めて会い、彼女の詩稿を見たのであるが、その印象を、「越前蘭女なとよりハ柔婉之趣有之」と言う。越前蘭女とは、越前の片山九畹（一七七七～一八三六）、菊池五山に詩を学び、頼山陽とも交のある女流詩人である。山陽はその九畹女史と比較して細香を評し、「柔婉の趣」を細香の資質として見抜いたのであった。第一期の詩が持つ清艶な美しさは、彼女の女性らしい感性が、頼山陽の適切な指導を得て結

実したものと言うことができる。

（三）第二期　白鷗社時代

文政三年～天保三年（四十六歳）

文政初年、大垣に詩社「白鷗社」が結ばれた。その中心となったのは、文化十四年江戸遊学から帰り、郷里大垣に身を落ち着けていた梁川星巌、頼山陽の高弟である村瀬藤城、星巌と同じく、江戸に遊学し山本北山門に学んだ柴山老山、そして江馬細香らである。美濃大垣において、名を挙げるに値する詩社が結成されたのは、殆どこれが最初と言って差し支えない。梁川星巌、村瀬藤城、江馬細香といった優れた詩人達を得て、この白鷗社が地方詩壇としては格段の水準の高さを誇ったであろうことは想像に難くない。文政四年、美濃詩人の詩を集めた『三野風雅』が津阪拙修の手によって編まれるが、その中核となったのも、彼ら白鷗社の詩人達である。

前にも触れた如く、化政期には漢詩が地方にも普及し、遠近の在郷で小詩人達が増え、また、その層が広がって行った。彼らの中、恵まれたある者は、京・大坂・江戸に遊学し、中央の文人の開く塾に身を寄せた。例えば、頼山陽門下の後藤松陰、山本北山の奚疑塾に学んだ梁川星巌などがそれである。また、ある者は、中央の文人と郵遞を介して師弟の関係を結んだ。江馬細香と頼山陽の関係がそれで、細香は自分の詩稿に添えて謝金を送る他、歳暮等、折々の進物を欠かさず山陽に送っているのである。

また、山陽ら中央の詩人達は、地方を遊歴し、各所各所の文人を訪ねている。こうした遊歴の目的は、見聞と共に、潤筆料を得ることにもある。山陽が文化十年、細香と知り合ったのは、尾張・三河・伊勢遊歴の途次であった。その後も彼は、文政元年三月から翌年二月まで九州を廻っている。地方遊歴によって、山陽ら中央の詩人は交遊を広げ、詩文を唱酬すると共に、地方地方の詩人達や詩社を結ぶ案内人の如き役割も果していた。

このように、地方に急速に増えつつあった教養人達は、山陽ら中央文人の収入源となっていたのであるが、頼山陽と地方詩壇との関わりは、それのみに依るものでは無論ない。

濃中白鷗社と申もの、鋭意作詩文候よし続き候へかしと祈申事に候。

（文政四年七月六日付　篠崎小竹・武内確斎宛　頼山陽書簡）

右の書簡は白鷗社に言及したものであるが、この一地方詩壇への、山陽の関心と期待が窺える。また彼は、美濃詩人の詩集『三野風雅』に載せる為の細香の相談にも応ずる外、地方の才能ある詩人を熱心に指導したことが、残された多くの書簡により見てとれる。一方、中央の文壇はどうであったか。

京師文壇索莫、未有如今日之甚見に付ても、奉待先生旗鼓東上。

（文政四年九月十八日付　菅茶山宛　頼山陽書簡）

当地なども扨々寥々ノ義、梅辻（春樵）中島（棕隠）などの膾伍にて、過日月候、口惜事に御座候。詠物の律、竹枝のみ、絶句などの外は、詩の様と存不申候。杜・韓・蘇などの七古などは、はなし候ても、アチラニ知ぬ程の事に御座候、可憐候。私ども作詩候ても、見せるものも無之、因て私丈の事も知人無之候。

（文政四年十一月二十一日
付、菅茶山宛　頼山陽書簡）

文政四年に認められたこの二つの書簡は、山陽の目に映った当時の状況を顕著に示している。こうした中央文壇への不満と失望が、山陽の地方に向けられた関心と期待に拍車をかけることともなったのであろう。文学の地方分化という流れ、その真只中に細香はいたのである。

さて、この期の細香の詩は、一転して愁いの色を帯びる。第一期において、彼女の世界を構成していたことばを「微風」「東風」「深閨」「柔指」「弓鞋」に代表されるようなものであったとするなら、この期、それらは「秋冷」「寒雨」「寒閨」「残花」「墜葉」によって置き換えられる。例として詩句を挙げてみよう。

午眠初覺小亭中　午眠初めて覺む小亭の中。
頰下枕痕些印紅　頰下の枕痕些か紅を印す。
（「初夏」）

時聞疎雪飛蟲撲　時に聞く、疎雪の飛蟲のごと撲つを。
數點圓痕疊碧紗　數點の圓痕碧紗を暈す。
（「四時詞・冬詞」）

昨雨新晴麗日喧　昨雨新たに晴れて麗日喧なり。
弓鞵歩到海棠村　弓鞵歩み到る海棠の村。
（「遊春」）

以上は、第一期に属するものである。その軽快な筆致、清婉な美しさは、前に述べた通りである。

征鴻嘹唳入雲飛　征鴻嘹唳雲に入りて飛ぶ。
何處秋閨人未歸　何處の秋閨か人未だ歸らず。
（「聞雁」）

西風淅瀝戰窓紗　西風淅瀝として窓紗に戰ぐ。
秋老庭園不見花　秋老いて庭園花を見ず。
（「秋日偶題」）

淡淡流輝不終夕　淡淡たる流輝終夕ならず。
庭西竹暗没斜明　庭西の竹暗く斜明を没す。
（「夏夜」）

詩題が秋冬に傾いていることもある。しかし、これら第二期の作品が、前のみずみずしい詩風より沈潜し、凋落、或いは翳りのある美に目が向けられるようになったということは、明らかである。

詩社「白鷗社」の中心となり、詩人としての一層の活躍が期待される、一見華やかな生活とはうらはらに、この期の彼女の詩を覆う影は、何に依るのであろうか。

偶作

春窓寂寂書慵開　春窓寂寂として書開くに慵し。
中酒情懐冷似灰　酒に中りて情懐灰に似て冷たし。
三日不添鳧鴨火　三日添へず鳧鴨の火
臥聞朝雨灑殘梅　臥して聞く朝雨の殘梅に灑ぐを

晩春偶題

芳事闌珊瞥眼過　芳事闌珊瞥眼に過ぐ。
斜風細雨到窓紗　斜風細雨窓紗に到る。
海棠殘艶蜂王國　海棠の殘艶蜂の王國。
楊柳新陰燕子家　楊柳の新陰燕子の家。
簾幙有香春夢煖　簾幙香有りて春夢煖かし。
庭園無月夜情賒　庭園月無く夜情賒なり。

閑情畢竟難除却　閑情畢竟除却し難し。
獨點唫燈賦落花　獨り唫燈を點じて落花を賦す。

「偶作」の寂々たる春窓、火の気のない香炉、残梅と落魄するものに引かれる彼女の心の中に潜んでいたのは、不安、焦燥とも言うべきものではなかっただろうか。「晩春偶題」の如く、春の詩さえも以前には見せなかった哀調を帯び、とりとめなく広がる孤独感が彼女に筆を執らせていることを思わせる。

文政三年、細香三十四歳、世間並の幸福を思い切り、風雅の中に暮らして来た彼女にとって、自分の生き方を見直すべき時期にさしかかっていたのではないだろうか。細香は画を愛し、詩を愛し、日々をその中に送ることを欲した。それは十分に叶えられたが、孤独という代償をも味わわねばならなかった。こうした自分自身の選択を、決して後悔していたわけではない。控えめながら、彼女には女流文人としての矜持がある。自ら選んだ道である。何ものにも換え難い充足感がそこにはあった。だが、友の去った夜半、窓に雨の降りそそぐ秋の一日に、ふと襲われる焦燥や喪失感、それを免れることはできまい。細香の生涯を思うに、彼女の心は焦燥と平安のはざまに行きつ戻りつしていたようである。身の衰えを予感し始めるこの期こそ、その振幅の最も大きい時であったに違いない。次の頼山陽の詩は、こうした細香の素顔を照らし出すものである。

細香女史書來。自言才思歳減。以此賦之。　　頼　山陽

不逢道蘊又經年　道蘊に逢はずして又年を經たり。
依舊才情誰競妍　舊に依る才情誰か妍を競はん。
只怕雪花春絮様　只だ怕る雪花春絮の様なるものの、
風吹却到綠鬢邊　風に吹かれて却つて綠鬢の邊に到るを。
（文政八年）

道蘊とは、才名を謳われた晋の女性、謝道蘊であるが、ここでは勿論細香を指す。山陽がユーモアの漂う、この暖かい詩を寄せて彼女を慰めたのは、年を経る毎に才能や情感が涸渇して行くのではないかという畏れを抱いた細香が、それを山陽に訴えたからであった。この頃の山陽の書簡を窺うに、詩人としての彼女、詩友としての細香の存在を、依然重んじてはいるが、文化年間の書簡に見られるが如き、恋情めいた思いは薄れて行く感がある。それが細香の孤独感を増さなかったと言い切れるであろうか。或いは、細香に自らの不安を訴えさせたものは、遠ざかりつつある山陽を呼びとめんとの、ささやかな媚を含んだ女心であったかもしれない。

文政初年頃の詩に賦される凋落の風景は、こうした細香の心の中の不安と焦燥とを反映したものと思われるが、むしろ潜在的であったそれが、四十路を迎えんとする文政七、八年頃の作品から、かなり直接的に吐露されるようになる。

自述

三從總欠一生涯　三從總て欠く一生涯。
漸逐衰顏益放懷　漸く衰顏を逐ひて益々懷を放つ。
擬試畫毫裂羅帶　畫毫を試みんと擬しては羅帶を裂き。
爲粧瓢口卸銀釵　瓢口を粧はんが爲に銀釵を卸す。
吟題洗雨蕉箋破　吟題す、雨に洗はれて蕉箋の破れたるを。
塗抹書空雁字排　塗抹す、空に書きて雁字の排なるを。
唯恐人間疎嬾婦　唯だ恐る人間疎嬾の婦。
強將風月倣吾儕　強いて風月を將って吾が儕に倣ふを。

右は、その題にも「自述」とある如く、詩画に耽る自らの姿を描いたものである。夫に仕えることを得なかった自分の生涯、勿論、それは詩を賦し画を描くことに捧げようという、自らの選択によるものであったし、それを間違いであったと否定する意はない。しかし、年月の経過と共に忍び寄る老いの影は、伴侶もなく一人閨中に暮す孤独に拍車をかけ、一層彼女の憂愁を深めるのであった。「人過盛年情總灰。寄身僧院隔塵埃」（「平等寺僑居雜咏」）「樂事稀疎鬢漸絲。唯親至淺一瓊巵」（「偶題」）「鬢絲斜照青燈影　四十明朝又欲過」（「除夜作」）等、皆それである。また「千歳猶知怨難盡。鵠鳩聲裏雨濛濛」（「題自畫墨竹」）はこうした彼女によって把えられる風景であり、さらに「露氣凄凄始欲凝。風頭入鬢自鬅鬙」（「柳溪居士見示中秋後二日舟行賞月詩。次韻却寄聊述羨意」）「新愁舊感夜沈沈。有酒今宵不可斟」（同）と、繰り返し自らの孤独な境涯が歌われる。

これらの細香の詩の価値は、その孤独が、その焦燥が、あくまでも自らのものとして、実情に即して歌われているところにある。

近世初期、儒者の余技、或いは道を推進する道具として、思想に従属する地位にあった漢詩文が、伊藤仁斎の「詩は人情を道う」との文学観を得て、独自の意義を認められるに至ったこと、さらに、護園派の人々によって実作の上で詩文の独立が果たされたことは、既に先学の御指摘のあるところである。護園派の活動は漢詩文盛行の原動力となったが、ようやくにして獲得された「人情」という内容が、古人の用いた語句を通してしか表現され得ないという文学観は、そもそも矛盾をはらむものであった。果して、古文辞格調派の詩を擬唐詩として批判する声は、服部南郭の時代より既に現れはじめ、天明三年、江戸の山本北山が『作詩志彀』を著すに至って、護園派の文学観は覆えされる。山本北山が提唱したのは、「目前ノ景」を賦すことであり、「自己ノ真情」を賦すことであった。この北山の主張に率られて、それを実作の上で示したのが、市河寛斎、柏木如亭、やや遅れて菊池五山、大窪詩仏ら江戸江湖詩社の詩人達である。彼らは目にふれるもの、心を動かすものをありのまま詩に賦そうと試みる。

詩は情の由て發する所。苟も興する所なければ、則ち一月、作らざる可し。境致一たび到れば、則ち一日、幾篇を累ぬるも、亦多と爲さず、若し必ず詩を以て課と爲さば則ち性靈を夭閼し、才情を桎梏す。粗率牽強の病、亦隨て生ず

（『五山堂詩話』巻六）

詩は人間の真の情に発するものなのである。従って人の心を動かすものであれば、詩にならぬということはない。物に感じ、心を動かすことができるならば、詩を成し得ぬという者はいないのである。ここに至っては、漢詩はもはや士大夫、士君子の文学ではない。下級士人でもよい。町人でもよい。各々が自らの情を、眼前の景色を、古文辞に依ることなく、今、ここで歌うことができる。かくしてこの時期、漢詩が地方にまで普及し、さらに女流詩人をも生むに至ったのである。

詩を遠くに求めることなく、「目前ノ景」と「自己ノ真情」を賦すればよい、という文学観、言葉の世界を詩人の実生活と一致させる態度は、化政期漢詩壇の風潮であるが、細香の詩が自らの情をそのまま写し得るものであり、またそうあるべきである、という思想は、他ならぬ師頼山陽によって育てられたものではなかったか。

文化十一年の「閑居夏日」詩に、山陽は、「句々實際。是僕法門」

との評を加えている。彼は、この「實際」を詩にするという態度は、あくまでも「僕法門」であり、自分の属していない詩壇、殊に京・江戸の詩壇の詩は真詩ではない、との気持ちを強く持っていたようである。文化十三年の「江行即事」を評して、

後二句タトヘト見ヘ候ヘトモキコヘガタシ。前二句ヲ轉結ニシテ御作リカヘ可被成候。詩ハスナヲナルカヨシ。況婦人之詩乎。君ノ詩スナヲナルニヨリテ佳詩多ク候。ワルク御ヒネリソコナイ被成マシク候。江戸五山ナトノ様ニナリテハムツカシク候。ハテハ狂詩ノ様ニナリ申候。

と言い、文政二年の「秋竹」詩に、

是等趣向京江戸ナトノ僞詩ニ落ル憂アリ。

と言う如くである。この頃の山陽が、京・江戸の詩壇に対抗意識を抱いていたことは、書簡よりも見てとれるが、それは京・江戸の詩壇を向こうに回して孤軍奮闘せねばならなかった当時の彼の立場に起因するものでもあろう。しかし、また同時に、京・江戸の詩壇で流行していた竹枝詩を「猥褻瑣細」(文化十二年八月二十九日付　菅茶山宛頼山陽書簡)と難ずるなど、彼らのある面では都会的な詩を、技巧過多な偽詩と退けていたことが窺える。細香の詩に施された評語にも、

實事眞詩、可喜可喜。
眞情實語、読之攬涕。

と、実情を重んずる姿勢が一貫して見られる。

山陽のこれらの語、そして彼の残した文学を閲して行くと、彼が漢詩という最も枠の定まった文学形式の中で自由な表現を試み、漢詩壇という世界で最大限に自らの人間性を解放しようとしていたと感ぜざるを得ない。彼は自らのありのままなる心を表出したものをこそ「真詩」と呼び、そうした「真詩」を作るよう、細香を導いた。それは冒頭に挙げた例にも見られる通りである。

かつて五山の評した清艶の風より、深く沈潜した細香のこの期の詩風は、自らの内面を凝視し、それを文学に昇華させようとする姿勢の現れであろう。詩人生活の充実に伴い、彼女にとって、漢詩が情を述べる文学として発展して行ったことが窺える。細香は詩論、随筆の類を残していないが、山陽に導かれ、育くまれた彼女の文学観の片鱗は、詩の中に見出すことができる。

讀紫史

誰執彤管寫情事　誰か彤管を執りて情事を寫せる。
千載讀者心如醉　千載讀者心醉ふが如し。
分析妙處果女兒　妙處を分析す果女兒。
自與丈夫風懷異　自ら丈夫と風懷異なる。
(中略)
五十四篇千萬言　五十四篇千萬言。
畢竟不出情一字　畢竟出ださず情の一字。
情有歡樂有悲傷　情に歡樂有り悲傷有り。
就中鐘情是相思　就中鐘情なるは是れ相思。
勿罪通篇事渉淫　罪むる勿れ、通篇事淫に渉ると。
極欲説出盡情地　極めて情を盡くすの地を説き出さんと欲す。
小窓挑燈夜寂寥　小窓に燈を挑ぐれば夜寂寥たり。
吾儂亦擬解深意　吾儂も亦深意を解さんと擬す。

「紫史五十四篇」とは紫式部『源氏物語』である。『源氏物語』は、近世初期の儒者達から淫猥の書として退けられていた。それが、山

陽、細香らに積極的に評価されているのは、「情を述ぶる」という文学の主題を極めているからである。「詩は情を述ぶる」ものであるという文学観を獲得した彼らにとって、王朝物語と漢詩とは、もはや異次元のものではない。共に一つの理想を目指した文学の形式ではないか。さらに細香は『源氏物語』に描き出された人情の機微を、作者が女性であるからこそ把え得たものとして称えている。それは、自らも女流詩人として筆をとる細香のささやかな誇りに他ならない。

（四）　第三期　山陽没後より、黎祁吟社・咬菜社時代

天保三年～文久元年（七十五歳）

天保三年九月二十三日、師山陽は結核で世を去る。又、天保九年、父蘭斎が病没する。詩人、画人としての名が広まり、郷里美濃においては指導的な位地に立ちつつあったが、人生を支えて来た二人との離別は、やはり細香にとって大きな痛手であった。かつて宴を共にした詩友達も離散し、鬼籍に名を登ずる者が年毎に増えて行く。この頃の彼女の詩から寂莫の色がぬぐえないのは、その為であろう。窓のほとりで、昔賦した詩を手に取る姿（「春晩」）、去年の宴を思いつつ、孤り手酌で月を眺める姿（「甲午中秋懐昨遊」）、全て、過去の追想の中に暮す日々の一齣である。節後の菊に寄せる心も、その孤独な姿に自らと相似通うものを見出したればこそであろう。一体感とも言うべき愛着が感ぜられる（「題自畫菊」「晩秋」）。天保五年に作られた「自遣」は、こうした天保期の細香の内面が吐露された興味深い作品である。

一夢匆匆半百人　一夢匆匆半百人。

幽懐縷縷暗愴神　幽懐縷縷として暗く神を愴ましむ。
月虧月滿望兼朔　月虧け月滿ちて望朔を兼ぬ。
花落花開秋又春　花落ち花開いて秋又春。
曾寫畫疑手猶別　曾て寫せる畫は手の猶ほ別なるかと疑ひ。
己看書覺眼重新　己に看れる書は眼の重ねて新たなるかと覺ゆ。
此身所願唯無恙　此の身願ふ所は唯だ恙無きことを。
猶有高堂老病親　猶は高堂老病の親有り。

老年、孤独という、寂寥たるを免れ得ない生活の中で、あくまでも欲望を制限することによって平静を保とうとする、彼女の人生観が窺える。

細香という人は、人生の哀楽に大胆にぶつかろうとするよりは、情熱を抑え、一歩控えた所から人事の変遷を見ようとする人であった。そうした彼女の態度は、若い頃より現れている。

種花不愛猶不種　花を種ゑて愛せざるは猶種ゑざるがごとし。
愛花不惜猶不愛　花を愛して惜しまざるは猶愛せざるがごとし。
愛有貪情惜有憂　愛すれば貪情有り、惜しめば憂ひ有り。
此意紛紛生拘礙　此の意紛紛として拘礙を生ず。

（「矢橋子直植櫻樹千餘株於金生山上。因徵四方詩。余方與焉」）

花を植えておきながら、花を愛さないとすれば、それは花を植えなかったと同じことです。花を愛しながら、花が散るのを惜しむ気持ちがないならば、それは花を愛していることにはなりません。愛する気持ちがあれば欲が出ますし、惜しむ気持ちがあれば悲しみが湧き起こります。こうした心が入り乱れて、こだわりが生じるのです。——美しいものを愛するが故に生じる憂情、それが必然であるならば、そうした必然を含む現実に拘泥せぬことによってしか悲哀を避

けることはできまい。文政三年の頼山陽書簡に次の件がある。

扨々御鬱陶と奉察候、世事御嫌にて、被欠人間之歡娯候義も有之所、今般之所にて見候へば、是れが却而苦悩之基と相成候と相見へ候、誤了半生女兒身、可惜。

愛執や快楽に身をゆだねることのできない彼女のストイシズムは、むしろそれが失われた際の愁嘆を恐れるが故であったのではないか。『源氏物語』に登場する女性達の中、自分は「空蟬の蟬脱ぎ來たるを」愛する（「讀源語」）と言うのも、自らの境涯を顧みて源氏への思慕を押し殺し、愛欲に溺れることを拒んだ空蟬の、自己抑制とも呼ぶべき態度に共感を覚えたからであろう。山陽は「誤了半生女兒身」と言うが、幸福な人生を求めての自らの選択であったのだ。それが現在の「苦悩之基」となったことは、彼に指摘されるまでもなく、彼女自身気づいていたことではあろう。しかし、何れの道を選んだところで避け難い苦悩であるならば、哀楽の情に翻弄されることを忌む彼女の性情は、淡雅な文人生活の中に自らの幸福を求めざるを得なかったのだ。

交態似潮知進退　交態潮に似て進退を知る。
世情如月察盈虛　世情月の如く盈虛を察す。
（「贈菅太古新ト居」）

人と交わるには、丁度潮の様に進むべき時と退くべき時があるということを御存じです。また、浮世の有様は、月が満ちては欠ける如くに移り変わるということを見分けていらっしゃいます。――これは友人の菅太古を評した言葉であるが、むしろ細香自身の理想を托すものと言えよう。

文政後年、天保初年頃から、彼女の詩には閑肆、平淡を旨とする宋詩風の表現が目立つようになるが、欲望を抑えることによって平静を得ようとする彼女の人生観を思えば、宋詩への接近を示すのも、極めて自然なことと肯える。

平等寺僑居雜咏

更無赤脚對茶鎗　更に赤脚の茶鎗に對する無し。
何有長鬚汲井烹　何ぞ長鬚の井を汲みて烹る有らん
暫寓如家常晏起　暫し如家に寓して常に晏起す。
臥聞隣寺弄簫聲　臥して聞く隣寺の簫を弄する聲

日々の忙事を忘れ去った生活を賦し「禅龕」「禅栖」「禅庭」「鼎茶」「熟香」「吟杖」「吟笻」といった言葉を用いるのも、この期に入って著しい。もっともこうした傾向は、必ずしも細香独特のものではなく、当時の漢詩壇の流行でもあった。広瀬淡窓は、宋詩風の趣味に片寄った詩の流行に「仮高士、偽雅人」と、手厳しい批判を加えている。しかし、細香の宋詩風の平淡な詩境への志向を、単に流行に従ったもの、えせ隠逸者であるとして葬ってしまうのは早計に過ぎる。

休言筆研自矜持　言ふを休めよ、筆研自ら矜持すと。
老去寒閨下翠帷　老い去りて寒閨翠帷を下ろす。
魚躍鳶飛皆至理　魚躍り鳶の飛ぶは皆至理なり。
梅香竹色舊相知　梅香竹色舊より相ひ知る。
酒如交友偏宜淡　酒は友と交はるが如く偏に淡なるを宜しとす。
詩似見山更愛奇　詩は山を見るに似て更に奇なるを愛す。
人世箇中有閑樂　人生箇の中に閑樂有り。
却疑天上月盈虧　却つて疑ふ、天上に月盈虧するを。

現実に深く拘泥することは、喜びを与えると共に、哀しみの振幅を

も大きくする。むしろそうした現実より離れる方が、自分には望ましい。そこで得られるのは、感激的な喜びではなく、「閑」なる楽しみである。弘化二年、梁川紅蘭に贈った「自述」に細香はこう語っている。細香の宋詩風への傾斜は、平静を保持することによって悲哀からの脱却を図る宋詩の中に、彼女自身が不安を昇華しようと懸命に模索し、自らにふさわしい人生観として求めた精神と相通ずるものを見出したからに他ならない。

弘化年間、小原鉄心らと共に開いた詩社、「黎祁吟社」、嘉永年間の「咬菜社」は、細香晩年の活動の場となった。時勢、老年、孤独による寂寥は一層深まって行くが、現実に拘泥することを拒む細香持前の人生観は、晩年の詩に至って、一種の諦念とも言える境地を示している。

人生蕉鹿夢悠悠　人生は蕉鹿の夢のごと悠悠たり。
無限塵紛何日休　限り無き塵紛何れの日にか休まん。
（「聞藤城山人去冬爲本邑里正。今夏赴犬山公召。賦此寄贈」）

浮生本如夢　浮生本より夢の如し。
聚散亦因縁　聚まるも散るも亦因縁なり。
（「戊午人日、同鐵心大夫雪爪禪師及松倉菱田二生遊無何有荘、賦此事。時將大夫下東都禪師飛錫於越前」）

淡雅な文人生活に充足しつつも、孤愁と焦慮の中に彷徨した細香の半生であったが、それも思えば夢の如くにはかないものである。

偶作

吾年七十四　吾が年七十四。
情味冷於灰　情味灰よりも冷たし。
無病身仍瘦　無病なるも身仍ほ瘦せたり。

綿衣欲窄裁　綿衣窄く裁たんと欲す。

細香がその生涯を通じて、自らの主題として憐惜し続けた情は、全く冷え切ってしまったのか。かつて「寫竹情懷猶未灰。世眼何知我儂意」（「自咏」）と言い放った彼女の、それは三十三年後、世を去る前年の賦詠であった。

江馬細香の作品は、現在その自筆原稿の多くを大垣江馬家が蔵している。中でも、細香が頼山陽に師事した文化十一年より、山陽の没する天保三年に至るまでのものは、山陽の朱批の施された詩稿が年代順に綴られ、天保三年以後のものは後藤松陰らが批を加えているなど、推敲の過程を伝える好資料である。その他、細香が参加していた詩社の課題草稿、書画、交友文人より寄せられた書簡なども同家に保存されている。尚、同家より逸せられていた文政九年夏頃より同十二年春頃、及び天保元年三月より同二年秋の作品を収めた二詩巻は、京都国立博物館が蔵している。これらの豊富な詩稿より、絶句、律詩、古詩併せて三百五十首を撰した『湘夢遺稿』上下二巻は、明治四年、細香の死後十年目に当り、その姪孫である江馬笋荘、春熙らの手で刊行された。細香の伝記としては伊藤信氏の『細香と紅蘭』及び、門玲子氏の『江馬細香』の二書が優れているが、彼女の残した詩については未だ殆ど研究が進められておらず、今後に俟つところが多い。

—本学大学院博士前期課程—